



## 『台湾漫遊鉄道のふたり』

楊双子 著 三浦裕子 訳

中央公論新社 刊

定価 2,200円 (本体 2,000円+税)

時は1938年、日本統治時代の台湾が舞台だ。日本人作家の青山千鶴子と台湾人通訳の王千鶴が鉄道旅行をしながらおいしいものを食べ尽くす漫遊記で、醤油味に煮込んだ豚肉のそぼろとニラを入れた豚骨スープで食べる“米節目”、粗糖や落花生の粉をふりかけたパンケーキ“麥煎餅”などの美食が次々と登場し、読む側の食欲を猛烈に刺激してくる。

青山は台湾独自の気候と風土に育まれた料理に心を揺さぶられる。そして、多言語を操り、教養が高く、美しく、料理まで玄人はだしの千鶴に完全に魅了される。いとおしさが募り、台湾人を差別する在台邦人などから千鶴を守りたいと願い、実行するのだ。千鶴はそんな青山に対し、私はそんなことを望んでいないと言い切る。青山の抱く千鶴への庇護欲は、啓蒙主義的な植民地支配であると気づかせるのだ。

当時の日本は、独自の文化を持つ

異国を未開状態の支援対象と決めつけた。それは見下していることと等しく、植民地支配を正当化する理由でもあった。青山は自身の行動を振り返り、日本が植民地に向ける偏見を批判しながらも自身の傲慢さには気づかなかったと恥じ入るのだ。

二人の間に流れる空気が濃密だ。それぞれが複雑な生立ちを抱えるからこそ互いの食における渴愛を理解し得た二人であるようにも思える。千鶴が遠ざかったのは青山の無意識的な植民地への偏見だけが理由ではなく、青山が千鶴の心に近づきすぎたからではないだろうか。他者への過剰な理解は相手を追い詰める。すべてを理解されてしまうと心の全部を支配されそうで怖くなるのだ。他者とは常に、私たちがどれほど理解しようと努めてもたどり着けない領域を持っていなければならないものなのかもしれない。

二人の決別から30年以上を経た千鶴のひとことが、民族間争いや帝国主義思想が今なお跋扈する現世に一筋の光を投げかけてくれる。

(日本農業新聞 齋藤 花)